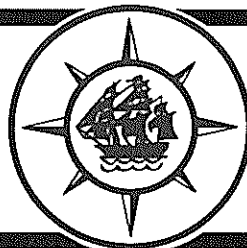


Operation Raleigh News

Operation
Raleigh

DENSO

No.21

昭和61年(1985)7月5日(土)
毎月1回発行●発行所 オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1-7-10 築地オーミビル502号
電話 東京(03)544-7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装株式会社のご協力で制作されたものです。

1986年次OR募集

第1次合格者528名決まる

1986年次OR日本代表派遣青年募集は5月30日に締め切られ、6月20日に第1次合格者528名が発表されました。約70日間の募集期間中、募集要項の請求者数は2,940名、うち応募総数は905名に達しました。ORJC事務局では都道府県別の集計を発表しましたのでご紹介します。第1次合格者の内訳は男子296名、女子232名。また学生・社会人別では453名対75名でした。

都道府県	募集要項 請求者数	応募者数	第1次 合格者数
北海道	81	12	6
青森県	2	2	2
岩手県	8	5	2
宮城県	41	9	6
秋田県	4	3	1
山形県	14	7	5
福島県	27	13	4
茨城県	65	11	9
栃木県	16	10	4
群馬県	25	4	3
埼玉県	129	29	15
千葉県	118	41	24
東京都	676	169	103
神奈川県	260	58	35
新潟県	21	9	4
長野県	26	15	8
山梨県	14	2	1
富山県	10	5	1
石川県	13	5	3
福井県	6	7	5
岐阜県	37	13	9
静岡県	58	28	19
愛知県	220	71	43
三重県	30	15	4
滋賀県	23	7	1
京都府	143	33	30

大阪府	297	92	49
兵庫県	146	62	30
奈良県	23	9	3
和歌山県	15	4	2
鳥取県	10	6	3
島根県	15	5	3
岡山県	30	20	13
広島県	53	15	10
山口県	36	8	6
徳島県	8	6	2
香川県	25	14	9
愛媛県	16	11	10
高知県	11	3	1
福岡県	85	23	14
佐賀県	13	3	1
長崎県	14	7	3
熊本県	15	11	8
大分県	9	8	4
宮崎県	14	3	3
鹿児島県	14	6	4
沖縄県	20	5	3
その他	イギリス3 アメリカ 合衆国 1	香港 1	0
合計	2,940名	905名	528名

ソロモンへ皇太子が電報

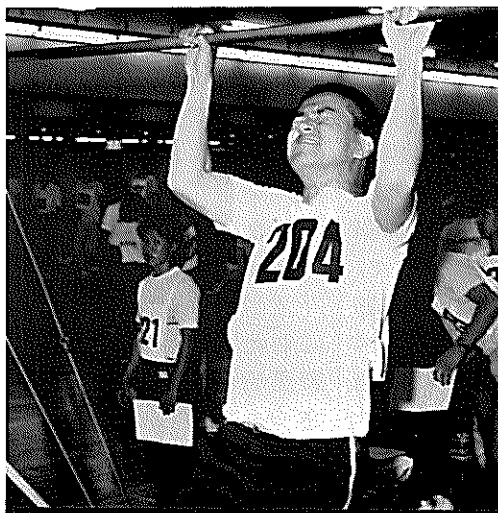
ソロモン諸島のベンチャーたちはサイクロンのために壊れた家の修復に協力したため、地元の人々から非常に感謝されました。このニュースをお知りになったチャールズ皇太子は「ソロモン諸島でオペレーション・ローリーが大変活躍しているということを知ってうれしく思います」という文面の電報をベンチャーたちに送られました。

第2次審査を実施

東京・大阪で体力テストなど

1986年次第2次審査は東京・高田馬場ビッグボックス(7月6日)および大阪・千里セルシー(7月13日)に実施されました。参加者は第1次選考に合格した528名(男子296名、女子232名)。体力測定(踏台昇降など5種目)と泳力測定にチャレンジしました。また英語筆記テストも行なわれました。

この第2次審査に合格した応募者は8月下旬に東京・大阪で予定されている面接、英会話テストなどに参加することになっています。



オペレーション・ローリー・シンポジウム'86「異文化間コミュニケーションの時代」



多数の聴衆集めて大盛況

オペレーション・ローリー・シンポジウム'86「異文化間コミュニケーションの時代」は、7月4日(金)午前10時から東京・プレスセンターホールで開催されました。一昨年、昨年に続く第3回目であり、これまでにない多数の聴衆を集めました。

シンポジウムは午前10時ちょうど波の音と映像で始まり、約7分のOR紹介スライドに続いて、白井健策朝日新聞東京本社編集局次長が「日本は情報を海外から入手するだけでなく、自ら情報を発信するように



筑紫哲也氏 北方謙三氏

努力しなければならない。このシンポジウムがその刺激になれば幸い」とあいさつ。

続いて、「フォーラム・世界に仲間をつくろう」と題して筑紫哲也朝日ジャーナル編集長、作家・北方謙三氏が登場。体験報告者として、1984年次参加青年の堀内一秀君(バハマ)谷川秀夫君(ホンジュラス)平野裕加里さん(パナマ)細田香納美さん(ペルー)高柳俊成君(チリ)の5人が発言しました。

午後は矢野暢京都大学教授、山崎正和大阪大学教授、片倉もとこ国立



矢野暢教授 山崎正和教授



片倉もとこ教授 ドナルド・キーン教授

民族学博物館教授と筑紫氏司会によるパネルディスカッション「異文化間コミュニケーションの時代」。3教授の講演に続いて異文化と異文明の定義づけにまで及ぶ議論が交わされました。

さらに休憩後、ドナルド・キーンコロンビア大学教授が歴史の流れに沿って日本人の国際感覚を中心に「国際人を目指す人達へ」と題する講演を行ないました。

最後に永井道雄ORJC委員長が「オペレーション・ローリーが将来にもたらすもの」と題して提言。牧野勇治ORJC事務局長の閉会あいさつまで約6時間30分におよぶ充実したシンポジウムでした。

シンポジウムのフォーラムたちの体験を語った5人の参りに感想を聞いてみました。

Q1 フォーラム「世界に仲間う」に参加、発言して、どんなを持ちましたか。

堀内 司会者が引き出そうとする答えと自分の体験がうまくわらず答えづらかった。また時間なくて、表層的な話に終わった。もっと突込んだ話があった。谷川 司会者とのやりとりの帰国後1年経過したことも自分の感想がまとまってきたよしかった。

平野 自分の体験や考えたこまくまとめて発言できなかつた。他の人たちの話を聞きながらの経験を思い出し、新鮮な気なれた。帰国して1年経ち、の大学生活の中で、いろいろを考えたりできた。よい機会と思う。

細田 もっとまとまりのあるたかった。自分の体験、感動識できたように思う。

高柳 マイクをもったら、すなければならず、話がまとまて困った。

Q2 自分の発言で一番いいこと、またはいい忘れたこ



ゼブ号南太平洋諸島

ゼブ号は6月17日オークランニューゼaland北島)に到着。ゼブ号の予定は8月4日にケズに入港するまで、バヌアツ、カレドニアなどの南太平洋諸ルーピングすることになって、ゼブ号のニューゼalandでは9月からの2つのフェイズ前PRとして大きな効果をもたらした。

フォーラム「世界に仲間をつくらう」に参加して



堀内君 谷川君 平野さん 細田さん 高柳君

ですか。

堀内 ORに対する外国と日本との考え方の違い。一般に考えられている内容と実際とのギャップ。
 谷川 人間ひとりひとりの育ってきた体験の違いが異文化であるような気がした。ORで得た友人は、さまざまな衝突の中で得たということをお願いしたい。またいろいろなことにチャレンジすることの重要性も感じた。
 平野 女性ひとりという厳しい状況でジャングルに入り、その経験から

「やれば何とかなる」という自信を得たこと。苦楽をともにした友人を得たことも。外国を体験して、素直な気持ちで受け入れられたこともよかった。これからも一生懸命自分で考えてやっていきたい。
 細田 言語は相手を理解し、自分を理解してもらうための重要な手段ではないこと。言葉が通じなくても、お互いのことを知ることはできる。ORに参加して、日本では体験できないことや自分の知らない分野に足

を踏み入れることができた。この体験を生かし、さまざまなことにチャレンジしていきたい。
 高柳 言葉や文化の違う者同士がつきあっていくには、とにかく好意をもって接していくことが大切だ。相手がこちらのことを本気で理解しようとしているのと、そうでないのでは同じヘタな英語を話すのでも全然感じが違うと痛感した。

Q3 シンポジウム全体で印象に残ったことは何ですか。

堀内 ドナルド・キーン教授の「国際化は相互理解から」という発言。言葉はよく聞くが、その意味が鮮明になった。
 谷川 ドナルド・キーン教授や永井委員長の話の中で日本の現代における鎖国化という言葉があったが、国際化が説かれている割に、そういう現実があることを実感しているのによく理解できた。
 平野 北方さんの「心に地平線をもて」という言葉がとても印象に残っている。これからもそういう気持ちを持続したい。
 細田 北方さんの言葉はいまの私にぴったりだった。
 高柳 僕も北方さんの「心に地平線をもて」がちょっとクサイがグッと感じた。

SWR号はクック諸島へ

SWR号では不幸にも肝炎患者が発生し、ピトケアン島での計画が危くなりました。SWR号は6月15日ヘンダーソン島に到着、5日間滞在しました。この島では無線士が世界各国との交信に成功しました。SWR号は6月20日ピトケアン島に到着。肝炎の免疫の人だけ上陸しました。6月23日にはクック諸島に向けて出航しました。SWRの科学プロジェクトではイースター島で新種のエビを発見したということです。

ソロモン諸島フェイズ

サバイバル・グループ
 9人のグループはヌサ・アガンナ島に緊急用具とラジオだけで上陸。内陸部の小屋に住み、魚とココナツを食べ、イカダでギゾへ帰ることを企てました。彼らは真っ黒になり、少

しげっそりとして空腹をかかえてギゾに到着しました。

第2次大戦残骸発掘グループ

マセ山の藪の中で米軍の爆弾を発見したり、ニュージョージア周辺の海で旧日本軍の爆弾や砲台を発見しました。また米軍機に爆撃され沈没した旧日本軍の船のところまで潜水したりしました。このプロジェクトは参加者全員が大変おもしろいと感想を述べています。

ノース・ペラ・グループ

ここではベンチャラーたちは地元の島民と一緒に生活し、いろいろな場所へ案内してもらいました。彼らは島の生活の調査と果物の成長を研究するプロジェクトも実行しました。

コラコラ・グループ

医療施設の屋根の修理グループは6月17日、修理を終え、ギゾに帰りました。

パプア・ニューギニア

ベンスバック・グループは馬に乗ってジャングル・パトロールを実施中です。これらのプロジェクトは主に爬虫類プロジェクトと関係しており、ニシキヘビやカエルなど多くの種類の爬虫類、両生類を収集しています。(以上ウィークリーブリテンNo.41)

オーストラリア北部

オーストラリア北部フェイズのドライブール川のカヌー旅行は6月17日終了し、グループは他のプロジェクトへ出発する前にダーウィンへヘリコプターで向かいます。ドライブール川のカヌー旅行に参加できなかったベンチャラーたちは、キャサリン川を下る計画を新しく立てています。英国から参加した身障者ベンチャラーは、この川の空からの偵察に参加しました。

日本代表派遣青年のページ

派遣地からの便り

オーストラリア北部

昆虫・鳥などの生態調査

いま、オーストラリアの北端ダーウィンからバスで5時間ほど内陸に入ったピクトリア・リバー・グレゴリーパークのプロジェクトに参加しています。ここに6週間滞在する予定です。ここには英国人30名、米国人10名のベンチャラー、その他スタッフ10名で日本人は僕ひとりです。

英語が母国語でないのも当然僕だけで、かなりの障害があります。しかし自分で望んだシチュエーションなのでとにかくがんばっています。日本や日本語に興味をもっている人がいて、かなり厳しい質問を受けることがあります。いまでは約半数の人が「KONNICHIIWA!」と僕にあいさつしてくれます。

現在のプロジェクトは昆虫、鳥、動物の生態調査です。1日5～6時間働き、あとは自由時間です。キャンプ生活を楽しんだり、ワニ狩りに出掛けたりしています。とにかく暑いところです。昼間は40℃近くまで気温があがります。空気はドライで洗濯ものは2～3時間で乾きます。そのかわり夜はセーターが必要なほど冷えます。

青い空と赤い大地、跳び回るカン

ガルー、ここの自然は雄大です。ただし、シャワー、水道、洗濯機やバーまであり、文明社会と縁を切ることを願っていた僕としてはまことに残念です。またデンソーカーエアコン付きのジープも6台あり、本当に快適です。僕はいつも荷台に乗っていますが……。 (藤本圭太)

「君は南十字星に何を語りかけるか!」去年のOR募集要項にはこんなフレーズがあったと思いますが、おかげさまで毎晩サザンクロスを見ることができます。こちらに来て20日あまり過ぎた時点での素直な感想を書きます。

まず語学。他のベンチャラーが英語圏出身ですから、日本人がそんななかで生活する以上精神的なプレッシャーを感じずにはられません。言葉を十分理解できないことでひとつひとつのプロジェクトの奥の深さ、楽しさは他のベンチャラーの半分も味わっていないと思います。しかし、この状態で終わらせるつもりはありません。僕は僕なりに何かをつかんで帰国するつもりです。 (鈴木治弘)

ソロモン諸島

赤十字センターの建設や考古学調査へ

ソロモン諸島のホニアラに着いてもう1ヵ月以上です。活動の中心地はギゾーで、30名あまりのベンチャ

ラーは現地の人たちのところにホーム・ステイしています。ここでは日本人は受けがよいようで、日本語であいさつしてくれる人もいます。ただ、カラタ(空手のこと)を教えろとってくるのには閉口します。

さて活動内容ですが、僕のグループはギゾーでの赤十字センター建設作業に2週間、ベララベラ島のコロコロクリニック修繕作業に2週間参加した後、ニュージョージア島での考古学調査に行きます。

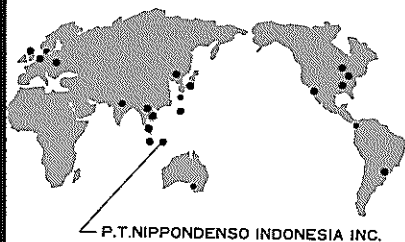
現在ベララベラ島です。ここは電気、水道、ガス、ラジオ、テレビもなく、エンジン付きのカヌーを持っているのも3人だけ。ココナッツ、バナナ、サツマイモ、マンゴー、パイナップル、魚貝はすぐに取れるので現地の人々は、せわしく働いていません。クリニックを補修中ですが、ノコギリ、カンナ、釘が日本と違うので作業は楽しじゃありません。

こちらの島々にはいろいろな人が住んでいます。原住民は島ごとに言葉が違います。キリバスという日本人によく似た人たちも住んでいて、僕らも日に焼けて黒くなったため、キリバスの人とみわけがつかなくなっています。彼らの村では生魚を食べ、サメの肉も干物にしています。しかも米を食べていました。ちなみに彼らは食事の時間が定められてなく、空腹になれば食べるみたいでした。このキリバス人は他のメラネシア系の人々と風俗、習慣がかなり違い、興味深く感じました。(土居雅紹)

デンソーワールドワイドオペレーションNo.10

インドネシア

島々の国。



P.T. NIPPONDENSO INDONESIA INC.



国名のインドネシア。原語では「スサントラ」といいますが、これは「島々の国」という意味。人間の住んでいる島だけでも992。すべてをあわせると大小ふくめて1万数千という数字になります。その首都ジャカルタにあるのが(ニッポンデンソーインドネシア)。エアコン、ラジエータープラグなどの様々な製品の製造販売を通し、島々の国との交流を深めているのです。

P.T. NIPPONDENSO INDONESIA INC.

所在地: Sunter2, Kel. Sungai Bambu, Jl. Laksda Yos Sudarso Tanjung Priok, Jakarta Utara, Jakarta, Indonesia

売上高: 1,573万ドル(31億5,100万円)

従業員数: 313人

<1986年4月1日現在>

DENSO
日本電装株式会社 千448 刈谷市昭和町1-1 ☎0566-22-3311